

# ラブライブ！サンシャイン！！～奇跡の輝き～

リペア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公はライブでの余韻を楽しみつつ帰路に着いた。

これからのことを考えつつ、眠りにつくと目が覚めたときには何もかもが変わつて  
いた。

慣れない景色や状況で戸惑っているとそこにはなぜか幼馴染を名乗る女の子がいた。

これはラブライブ！サンシャイン!!そして、Aqoursのファンである主人公の物語

# 目次

プロローグ

主人公の人物設定

出会いは突然に

桜咲く出会い

16 9 6 1



# プロローグ

主人公、東藤亞樹人はAqoursと過ごした最高の夏「Aqours 2nd Love Live! HAPPY PARTY TRAIN TOUR」の埼玉公演を終え、ライブでの余韻を噛み締めつつ東京にある自宅へ戻った。

――――――

「はあ、Aqours 1stで発表され、名古屋から始まつたツアーもついに終わつてしまつたか・・・。」

オレは人生で初めて参戦し、全力を持つて参戦したツアーの終わりに一抹の寂しさを感じつつも確かな満足感や感動を感じていた。

「ツアーは終わつちやつたけど3rdツアーも発表されて、来週からは2期も始まるから楽しみだ！」

そう、ツアーの殆どに参戦し最後の埼玉公演2日目では来年初夏から開催される3rdツアーの事に關しても2期同様に期待を膨らませていた。

「来年、3rdツアーを全通するためにもまた明日から頑張らないとな・・・。」

オレはこの夏、Aqours初のツアーと言うことで会場となる3都市を回つていた

が不思議と疲れはなく、新たに目標も出来たところで気合いを入れ直す。

「とは言えそろそろ眠くなつてきたし、寝ないと。ふわあ……。」

そう言いつつ、大きな欠伸をすると寝るための準備に入ろうとしたところであるものが目に入った。

「やべっ、忘れないようにこれも片付けておかないと……。」

そう、目に入ったものとはこの夏の2ヶ月間共に駆け抜けた仲間・相棒人も言うべきブレードやグッズたち、これはオレのなかで思いでと共にかけがえの無いものになっていた。

「みんな、来年もよろしく頼むぜ……。」

オレはひとつひとつに感謝するようにグッズの手入れを行う。

Tシャツは網に入れて洗濯機へ、アームバンドは消臭剤を掛けて乾燥。ブレードの電池は一通り抜いてブレードバッグの中へ。

「よし、こんな所かな。つと、もういい時間だしそろそろ寝ないと明日がまずい……。」

オレはスマホを手に取り、明日のバイトの時間を確認すると音楽プレイヤーの曲からリラックス出来る音楽を選択し、再生させて布団に入り、電気を消す。

「明日は幸いにも日曜日。今回のお礼と次のために、神田明神でお参りしてこようかな……。」

その内、次第に瞼も重くなり目を閉じると深い眠りへと落ちていった。

――――――――――

どれくらい経つた頃だろうか、オレの意識は暖かいところに浮いている様な感覚がしてきました。

あれ、オレって寝ていたはずなのに、ここはどこだ・・・?

オレは必死に今の状況を整理しようと頭を働かせようとしたところで、不意に頭の中に声が響く。

『たす・・・て、ラ・・・ライ・・・!』

それは、アニメでよく聞き慣れた声だった。

「この、声は・・・」

夢の中なのか、はつきりしない意識のまま声のする方向へ手を伸ばす。次の瞬間、大きな衝撃が体を襲つた。

「いってえ、何が起きたんだ・・・。つて、え？」

朝になつたのか、目を覚ますとどうやら寝ている内に動いてしまい床に落ちてしまつたようだつたが、部屋の中は自分の部屋の様ではあつたが違和感があつた。まず、自宅では床の上のマットレスの上に布団を敷いてあるものでベッドではなく、住んでいるのも大学進学と共に1人暮らしを始めて都内の1Rマンションに住んでいたためあまり広いとは言えなかつたが、ここはそこよりも広くどちらかと言えば実家の部屋に似ていた。

「ここはどこなんだ？・・・つて、寒っ!?」

雰囲気や状況が変わつていても関わらず、変に落ち着いていた自分にも驚いていると、何故か寒さに襲われた。慌てて枕元に置いた筈のスマホを点け、日付を確認する。

「え？ 嘘だろ・・・」

日付を確認すると、【4月】と信じられないことが表示されていた。ツアーチケットが終わつたのが9月末であり、まだまだ残暑が厳しかつた事を考へるとこの寒さは信じられなかつ

た。

起きたてで未だはつきりしない頭の中を巡らせて考えていると、部屋が2階なのか誰かが階段を上つて来る音がしてきた。階段を上がりきったのか、廊下を歩いているらしい。その足音もオレの部屋らしき場所の前で止まつた。

「？」

なぜか疑問に感じていると、次の瞬間、勢いよくドアが開かれた。

??? 「おっはヨーソロー！起つきろー！朝だぞー！」

オレは目の前で信じられない光景が広がり、スマホを落としてしまつた。

# 主人公の人物設定

東藤 亜樹人

大学1年生。身長は178cm。A型。

東京都内にある大学へ通っているが、ライブ後に帰宅して就寝したのちにラブライブ！サンシャイン!!の世界に跳ばされてしまう。

主人公がラブライブ！サンシャイン!!とAQoursを知ったのは、とある雑誌を読んでいたことがきっかけで、AQoursの推しは高海千歌と小原鞠莉。

好きな曲はHAPPY PARTY TRAINとMIRAI TICKET。

性格は優しく面倒見のいいタイプ。そのため、千歌や曜、鞠莉に振り回されている。成績は良い方で梨子よりは下であるが、機転を利かせる事が上手。何かあると、その度に色々とフォローに回る。

好きな動物はネコであり、中でもマンチカンやスコティッシュフォールドが大好きであり、部屋にはネコ関係の本や写真集がいくつか置いてある。

趣味は模型製作。こちらの世界に来てからは、駅前の商店街にある模型屋さんへ頻繁に行っている様子。

こちらの世界では、曜の家の隣に昔引っ越してきて以来、親同士が仲良くなりお隣さんで家族ぐるみで仲が良いと言うことになつていて。

跳ばされた際にいくつか設定が変えられており、浦の星は合併の他に共学化の方針も出されており主人公は共学化に際してのテストケースとして編入することになる。浦の星編入前は沼津の高校へ通っていたが、2年生へ進級する直前に浦の星の新理事長から依頼を受ける。

制服は共学化にあたり新たに男子生徒用のを作ることになつたため、試作品として2つのパターンがあり、1週間毎交互にそれぞれのパターンの制服を着ている。

Aqoursメンバーの中で幼馴染みは千歌、曜、ダイヤ、果南、鞠莉、ルビィ。

千歌、曜、鞠莉に振り回され、ダイヤや果南に助けてもらうこともしばしば。千歌と曜は、幼馴染みということもあります。果南とは千歌や曜と遊んでいるうちに知り合う。ルビィに関しては、父親以外に関われる唯一の男性となつていて。鞠莉にも色々と振り回されることがあるが、それは小学校の時のとある出来事がきっかけで以来、信用しているからだそう。

実は、元の世界では幼少期を沼津で過ごしている。小学校入学前に親の転勤の関係で、愛知県へ引っ越している。高校卒業後、本人いわく「イベントやライブに参戦した

い」との理由で大学を都内に決め上京、バイトもしている。跳ばされる前、大学へ行っていたときの休みの日はゲームセンターへ行つてアケフエスをプレイするのが日課であった。

# 出会いは突然に

「え、うつそ……どうして……？」

突然勢いよく開かれたドア、そこに立っていたのは思いもよらない人物だつた。

曜「どうしてつて、亜樹人を起こしに来たんだよ！」

その姿を見間違はずもない。アニメで何度も見た姿であり、推しである千歌の幼馴染みの渡辺曜。その姿を見たとき、オレの意識は一気に覚醒して眠気などどこかへ行つてしまつた。が、突然の事にオレは動けずに色々と考え込んでしまう。  
 (なんで、ここに曜がいる!? それにもしても、ここはどこなんだ!?)

と、オレが右手を寝起きでボサボサの頭に当てて考えていると、さつきよりも曜の声がすぐ近くで聞こえた。

曜「おーい、どうしたの？」

「うおつ!」ビクッ

何かを心配したのか、曜がオレの顔を覗きこむ様に近づいていた。突然の事にオレは驚き、後ろに飛び退いた。

曜「うわつ!? ちよつ、どうしたの、いきなり」

「だつて、いきなりオレの部屋に来るし一体何がどうなつてるの？」

曜「何がつて、亞樹人のお母さんに頼まれて起こしに来てるんだよ。と言うか、昔からなのにどうして？」

「昔から!?」

曜「うん、そうだよ。だつて、昔からの幼馴染みだし♪」

どうやら曜はオレと幼馴染みで、昔からオレの母さんに頼まれてオレを起こしに来て  
いるようだつたが、なぜ曜がオレの部屋に慣れた様子で来ているのかが未だに理解出来  
ていなかつた。しかも、ちよつと嬉しそうにしているし、その笑顔がまた可愛い。

「……つて、そうじやない！なんで、アニメの中の曜がオレの目の前に!?」

事実、今までアニメの中でしか見たことの無かつた人が目の前にいる。オレはそれだけ軽くパニクつていたが、ふと外を見ると見覚えのある家が建つていた。

「もしかして、まさか……！」

考えるよりも先に体が動いた。ここに曜が居て、窓の向こうには見覚えのある建物、  
これを確認せずにいられなかつたオレはそう思い、部屋の窓際まで行き戸を開けると  
ベランダに立ち外を見た所、オレの家と思われる建物の隣には曜の住んでる家があつ  
た。

曜「だ、大丈夫？なんかとんでもない感じに寝ぼけてるみたいだけど、アニメの中と

かつて何の話?」

「ああ、大丈夫……ところで、曜はどうしてオレの所に?まだ朝も時間が早いのに。」  
曜「さつき言つたでしょ、昔から起こしに来てるつて。それに、今度から浦の星と一緒に通うんだから遅刻されたら困るからね!」

「い、一緒に通う!? 浦の星に!? だつて、あそこつて……」

浦の星女学院。曜を含め、A q u o u r s のみんなが通つている学校だ。名前からでも分かる通り、浦の星は女子高であり、男である亞樹人が通える所ではない。

その時、開けられたままになつてゐる部屋の入り口にダンボールが置かれてゐるのが目に入つた。

「ん? なあ、曜。あのダンボールはどうしたの?」

オレは気になり、曜に聞いてみる。もしかして、この話の流れからするとまさか……。

曜「ああ、あれ? 亞樹人の制服だよ。亞樹人のお母さんから『今朝と言ふか、さつき届いてね。あの子起きないから、持つていつてあげてちようだい!』って言われて持つてきたの。」

「オレの制服! ? どこの! ?」

曜「ちよつと大丈夫? 一旦落ち着こうよ。」

「あ、ごめん……」

曜に促され、数回深呼吸をする。・・・うん、少し落ち着いたかな。

「ふう・・・、でも、オレの制服つて一体どうして・・・。」

曜「だからさつきも言つたよ？一緒に通うつて。」

「一緒に通うつて言つたつて、浦の星は女子高じや・・・」

そう、一番の問題はそこだ。なぜ、オレが通える事になつているのか訳が分からぬよ。さつきは目の前にいきなり曜來たことで聞くのを忘れていたけど、これだけは聞かないといけない気がする。

曜「あれ？ 聞いて無かつたつけ？ 浦の星つて新年度から共学化になるつて。」

「共学化・・・」

浦の星女学院の共学化。曜の口から出た一言は、オレ自身も知らないことだつた。さつき外を見たときも、聖地巡礼をしたときはお店だつたのが今は曜の住んでいる家になつていて。と言うことは、何かが原因でラブライブ！サンシャイン!!の世界に来てしまい、オレと言う異分子が混ざつてしまつたことで元々あつた『こちらの世界』に影響が出た。浦の星女学院の共学化と言うのも、そのせいだろう。結論は出たが、すぐに何かをしようとしても出来ることはない。

曜「だから、始まる前に制服を確認しておこうと思つて！」

「もしかして、曜はそのために来たとか・・・？」

曜「もちろんあります！」

いきなりのことで色々と考えが追い付かないオレを余所に心なしか、曜の表情は嬉しそうであつた。それもそのはず、曜はコスプレなど衣装が好きであり、まあ、今は考へても仕方がない、オレは廊下に置かれていたダンボールを持つと部屋の中に運び入れた。

箱に貼られている伝票を見ると、1つは『夏用制服』もうひとつは『冬用制服』と書かれていた。冬用から開けてみると白のブレザーとワイシャツとグレーのズボン、夏用には白のワイシャツと夏用ズボンが入つており、あとは2年生カラーレーである赤のネクタイが入つていた。

曜「おお～！これが新しい制服！結構カッコいいね！」

「そうだな、まさか白のブレザーだとは思わなかつた。」

ふたりで盛り上がり上がつてると下から誰か登つてくる音がした。この感じは母さんだろう。

「ふふ、早速やつてるわね！どう？新しい制服は」

やはり母さんだつた。母さんは締まりかけで少し空いていたドアから顔を覗かせている。

「思つてたよりも結構良いので驚いてるよ。あ、そうだ母さん、少し聞きたい事があるん

だけど

「ん？ なにかしら？」

「制服と言い、いつの間にこんなことになつてたの？」

ようやくこの事が聞けて安心していると、母さんは少し申し訳なさそうに切り出した。

「ごめんね、お母さんが編入手続きしちゃつた？」

「マジかよ・・・」

昔からある意味自由な母さんに振り回されてきた事もあって、ある程度予想はしていたがそれでも予想の斜め上を行つていた。こう言うことって、身内が出来るものなのかな？等考えていると、母さんはさらに続ける。

「ほら、亜樹人つて今の高校でも知り合いが少なくて寂しいって言つてたから、丁度浦の星が共学化されるつて聞いてあそこなら曜ちゃんはもちろん、千歌ちゃんもいるから安心だと思つたのよ。今でもたまに寝坊するでしょ？」

いきなりではあつたが、母さんなりにオレの事を考えての事だつたのか。確かに、寝坊すると遅刻に繋がつてしまうから非常にまずかつたりする。となると、曜がこれからはオレを起こしに来るとかそう言うことが・・・？

「確かにそうだけど・・・」

「なら良いじやない。曜ちゃん、悪いんだけどこれからは亜樹人を起こしに来てくれないかしら？」

曜「分かりました！頑張るであります！」

ホントに決まっちゃつたよ・・・。それにしても、これからオレはどうなるんだ？この世界でうまくやつていけるのか？など色々な考えを巡らせながら、届いた制服の片付けをしていくのだった。

## 桜咲く出会い

亞樹人 「ついにこの日が・・・」

あれから数日後、浦の星への編入の日がやつて來た。今日は転校初日と言うことで最初から遅刻するのは不味いので、こうして早く起きていた。

亞樹人 「さて、着替えなきやな・・・」

そう思い立ち、服を脱いでいると誰かが階段を上つてきた。まさか・・・

曜 「おっはよー！起きてる？・・・って、きやあああ！」

そう、そのまさか。前に母さんからオレを起こすようにお願いされていた曜が、オレの部屋に突撃してきたのだつた。

亞樹人 「よ、曜！」

叫び声で振り返ると、制服姿の曜が顔を真つ赤に両手で顔を覆つていた。

亞樹人 「ちょ、早くドアを閉めて！早く！」

オレが曜に言うと、曜は慌てて部屋の外に出てドアを勢いよく閉めた。

（～～～～～～～～）

亞樹人 「お、お待たせ」

着替えて部屋の外に出ると、曜が居ないようだつた。1階に行つてゐるのか？  
そう思いつつ、初登校の準備を終えて1階に降りると曜が母さんと一緒に朝ごはんを作つていた。

母さん「いやあ、曜ちゃん朝から悪いわねえ！あの子を起こしてくれるだけじゃなくて、朝ごはんの準備まで・・・」

曜「大丈夫ですよ！私、家でもたまにやつてますから！」

曜は母さんと楽しそうに談笑しているようだつた。

亞樹人「おはよう！」

オレは、さつきの事をなるべく気にしないように平静を装つて席に着こうとした。そしたら、母さんが衝撃的な事を言い出した。

母さん「そう言えばさつき、曜ちゃんの大きな声がしたけど何があつたの？」亞樹人、もしかしてあなた曜ちゃんを」

亞樹人「べ、別に変な事はしていないよ！な、曜！」

曜「う、うん！私が亞樹人の着替え中に部屋に入っちゃつただけですから！」

やはり、さつきの事は母さんに聞こえてたようで、ふたりして急に説明したから変に慌ててしまつた。

曜「あ、亞樹人！私は千歌ちゃんとやる事があるから先に行くね！」

曜は素早く朝食を食べ終えると、学校へ行くと言い家を早々と後にした。

母さん「亞樹人、あんた本当は曜ちゃんにかしたんじや・・・」  
まずい、さつき変に慌ててしまつたことで母さんが怪しんでいる。

亞樹人「本当に何も無いって！」

母さん「そう、なら良いけど早くしないと遅れるわよ？」

母さんに言われて時計を確認すると、出ようと思っていた時間ギリギリだつた。オレ  
はトーストを食べ終わると、浦の星指定のスクールバッグを持って家を出た。

浦の星は沼津の中でも内浦と言う地区にあり、沼津駅近くにあるオレの家からは駅前  
でバスに乗らなければならない。

バス停に着くとバスは来ていないようで、曜がまだバスを待つてゐる。

亞樹人「曜！」

曜「あ、亞樹人」

オレは曜に声を掛けたが、オレの顔を見るなり顔を背けてしまつた。心なしか、顔が  
赤かつたような気がする。

曜「その、さつきは着替えてる時にごめんね」

やはり、着替えの事を気にしてたか。鍵をしておけばよかつたな・・・。

亞樹人「オレの方こそごめん。あんなことになつちやつて。」

オレがそう言うと、曜は顔を上げてこちらに笑顔を向けてきた。

曜「良いよ。私は気にしてないから。ほら、そんなに暗い顔してちやみんなに笑われちゃうよ？」

曜とそんなやり取りをしていたら、バスがやつて来た。オレと曜は浦の星前のバス停まで毎日これで通うことになる。

オレと曜が乗り込んだ後にもう一人、黒く長い髪の娘で右側にお団子がある人が乗ってきた。制服は同じなので、浦の星の生徒なのだろう。だが、リボンの色が違う。

曜に聞いてみると曜たち2年生は赤、今乗ってきた子が着けている黄色は1年生らしい。

そうして話をしている間に、バスはとある旅館の前に止まつた。看板を見てみると『十千万旅館』と書いてあつた。

亞樹人「(十千万つて事は、もしかして……)」

?? 「あ！曜ちゃんおはよう！」

予感的中、元気よくバスに乗り込んできたのは、あの高海千歌だつた。

千歌「亞樹くんもおはよう！」

そう言うと、千歌は曜の反対側、オレを挟む様な位置に腰を下ろし、こちらに笑顔を向けてきた。おお、まさか千歌の笑顔をこんな間近で見られるとは、なんたる僥倖！

?  
千歌  
——ねえ、  
曜ちゃん。  
昨日言つてたけど、  
今日はどうしていつもより少し早めなの

曜「それはねほら、亜樹人くんつて今日から特別編入で来るから一応職員室までの案内は必要でしょ？だからね。」

千歌「あゝなるほど。つて、編入生つて亞樹人くんの事だつたの!?  
千歌はとても驚いた様子であつた。前に曜や母さんに聞いた話では、編入してくる才  
レの事は直前まで対外秘だつたようで千歌が知らなかつたのはそのためみたいだ。

亞樹人「まあ、そんな感じだからこれからよろしくな。」

それこそ、千歎（せんかん）とまで叫（さけ）び合（あわせ）な感じ（じぶん）がする。一対（いったい）のうなつて、くるんぐるん。

到着した。

降りると、劇中で何度も目にしたあの坂が目に入る。

千歌「よし、着いた！ そう言えば、亞樹くんは道分かる？」

そうだつた、劇中で何度か見たことはあつたけど実際にどう行つたら良いか全然分からんなど。

亞樹人「いや、実は全く分からぬ……。学校に着いたらひとまずは職員室に来い

とは言われてるんだけど。」

曜「だつたら千歌ちゃんと私で職員室まで連れていつてあげるよ。それなら大丈夫じゃない?」

オレが少し申し訳なさそうにしていると、曜から提案があつた。

亞樹人「本当に良いの? 曜は千歌とやることがあるって言つてたけど大丈夫?」

曜「うん! やると言つても、今日の始業式の後だから今は大丈夫だよ! ね、千歌ちゃん!」

千歌「そうだよ! だから、亞樹くんは安心してくれても大丈夫なのだ!」

そう言うと、千歌と曜はオレの前を歩き出し、浦の星へと向かつた。  
~~~~~

浦の星に着くと、千歌と曜に案内してもらい迷うことなく職員室へ行くことができた。ふたりはなにやらやることがあるとの事で、足早に教室へ行つてしまつた。

亞樹人「ここが職員室か。失礼します。」

軽くノックしてドアを開けると、先生が1人こちらまでやつて來た。

??? 「どうしたの? まあ、とりあえずこっちにどうぞ。」

対応してくれた先生は、黒髪のストレートでスタイルも良く黒のスーツを着ていた。

亞樹人「今日からこちらでお世話になる試験編入生の東藤 亞樹人と言います。よろ

しくお願ひします。」

先生「ああ、あなたが今日来るつて言つてた人ね、私は笹原つて言います。担任はあなたが編入する2年生のクラス。試験生と言つても、男の子はあなたが1人だけだから何でも相談に乗りますよ。」

亜樹人「はい、ありがとうございます。」

良かつた。確かに、浦の星は女子高だからオレ1人だけ男つて言うのは改めて考えると心細いものがあるからな。

笹原先生「じゃあ、東藤君。教室へ行く前に1回理事長室へ行つてもらう事になるの。」

亜樹人「理事長室?」

笹原先生「そう、今回の編入に関する通知も理事長から行つてるはずだから、挨拶にね。」

笹原先生はそう言うと、席を立ち理事長室までオレを案内してくれた。

（～～～～～～～～）

笹原先生「ここが理事長室。私は職員室に戻りますけど、終わつたらまた私の所にお願いします。戻つて来次第、今度は教室へ行くので、また後で。」

その後、先生は職員室へ戻つて行つた。

それにもしても、理事長つてまさか・・・まあ、とりあえず入つてみないことには。  
そう思い、理事長室の扉をノックする。中には理事長が居るようで、返事が帰ってきた。

亞樹人「失礼します。」

???「亞樹人～！」

オレが部屋に入つた途端、1人の女の子がオレに抱き着いてきた。  
そう、この人こそ浦の星の理事長にして元の世界でのオレの推し『小原鞠莉』だつた  
のだ。

鞠莉「待つてたわ、亞樹人。」

鞠莉はオレから離れると、理事長の椅子へ座り直した。

亞樹人「ま、待つてた!?それに、試験編入つて一対どういう事ですか!?」

鞠莉「不安なのは分かるけど、落ち着いて。前にあなた宛に送つた通知にもある通り、  
今現在の浦の星は廃校の危機にあるの。今まで通りに受験生を募集できれば今のままで運営していくことになるんだけど、そうでなければ来年から良くて共学、でもこのままなら廃校は濃厚なの。だから、今年試験生としてあなたを迎えて様子を見ようつて事にしたの。」

そんなことがあつたのか。ん?でも、元の世界では浦の星は夏休み後に廃校が決まる

とあつたはず。もしかしたら、オレが来たことで色々変わっているのか？

鞠莉の話を聞きながらそんな事を考えていると、鞠莉がオレの顔を覗きこむ。

鞠莉「どうしたの？ 何か分からぬ事でもあつた？」

亞樹人「い、いや大丈夫。」

鞠莉「そう、でも安心してね。私は理事長である前に、亞樹人の幼馴染みなんだから何でも言つてね。相談に乗るわ？」

亞樹人「本当に？ ありがとう、助かる・・・」

オレは慌ててアピールをする。突然とは言え、鞠莉程の綺麗な顔が近くへ来てしまうとどうあつても慌ててしまう。でも、千歌や曜に引き続き、鞠莉まで幼馴染みとは・・・。

鞠莉「なら良かつた！ ジヤア、私はこのあと授業があるから教室に行くわね！」

鞠莉は変わらず笑顔でそう言うと、オレの手を取り廊下まで出た。

まさか、推しに手を引いてもらうなんて思わないな・・・。でも、鞠莉の手、柔らかかつたな・・・。

などと考えていると鞠莉が少々悪い顔をしている。

鞠莉「あら？ もしかして、亞樹人つたら。」

まずい、変に詮索されないうちに職員室に戻らないと。

亞樹人「じゃあ鞠莉、オレ先生に職員室に来るよう言われてるから、じゃあ！」

危ない危ない。これでバレなかつたかな？気になるけど、とりあえず職員室に行くしかないな。

~~~~~

オレは職員室に戻ると、先生が待つていてくれた。少し中を見渡すが先程より他の先生が少ない。授業開始の時間が近いからそれぞれの教室へ行つたのだろうか。

先生に行つてきた事を伝えると、いよいよこの1年間過ごす事になる2年生の教室へ行くことになった。